

平成27年度 第2回南部町教育協働みらい会議 議事録

開催日時 平成28年1月18日(月)
 午前10時00分～午後0時00分
 開催場所 法勝寺庁舎 2階 会議室
 出席者 坂本町長、細田委員長、井上委員、森岡委員、板委員、永江教育長
 事務局 加藤総務課長、板持教育次長、清水総務・学校教育課長
 書記 総務・学校教育課 水嶋室長
 欠席委員 なし

	【開会 午前10時00分】
	【1. 互礼・開会】
	【2. あいさつ】
坂本町長	1月16日(土)の地域振興協議会事例発表会では子どもを中心にすえた特徴的な取り組みが目立った。コミュニティスクールの施策が地域住民の支援をうけ、地域振興協議会の活動の中核となるころまでできたと感じる。子育て、教育を通して南部町を発展させたい。教育も少子化対策の一端を担っていると考える。地方創生の中で、子どもに関わる施策(少子化対策等)を考えていきたい。
細田委員長	南部町教育の一步前への歩みが止まらないよう、確実に一步ずつ進んでいきたい。南部町に根づく子どもの教育を目指したい。
	【3. 意見交換会】
	(1)子ども達の未来を生き抜く力の育成
	①未来を生き抜く力の育成
	②選挙権年齢の引き下げに義務教育が果たすべき役割は
細田委員長	義務教育段階からのキャリア教育の重要性を感じる。社会に出たときに対応する力を子どもの時から育むような取り組みが必要。「選挙権を与える」ということだけでなく、ふるさとの町の動きから世の中の動き、政治の動きがつかめるように。その土台となる教育が必要である。
井上委員	未来を生き抜く力を育むためには、親を含めた大人が体験したことを子どもに伝える。社会人として最低限必要なことを習得させることが義務教育の役割。公平な見解や自分で判断できる力を養うには、新聞が有効ではないか。
森岡委員	自分のことに責任をもつ。家庭・地域・学校がそれぞれ役割分担し、責任を果たす。教育振興計画をきちんと振り返り、目的を明確にして、教育委員会は取り組まなければならない。選挙権については、「政治の面白さ」を義務教育の中で伝えること。町議会がもう少し身近であってよいのではないか。
坂本町長	体験を通してこそ未来を生き抜く力は育まれる。子どもたちに体験のチャンスや場の提供が必要である。Aの意見もあり、Bの意見もありという経験を積むべき。大所・高所から見る目を養う。若い人の意見を政治に反映することは大事。

	そのもとをつくるのが義務教育である。「政治は面白い」ということを印象付ける教育をしてほしい。
	教員の個人的な思想によって色づけが義務教育の中でなされないように。
永江教育長	教職員の選挙権に関わる認識は弱い。主権者教育について県教委から何も無い。
	「まち科」の学びの必要性を学校に投げかけてきた理由は、小学校教員に義務教育の出口を見据える認識が弱く、中学校教員も高校どまりであるから。出口を意識した義務教育の役割を果たさなければならない。
	土台はコミュニケーション力、ふるさと愛着力、将来設計力、社会参画力が必要となる。全てが学校教育ではないが、学校教育の仕組みを活用してこの4つの力を付けることが未来を生き抜く力を育むことになる。そのためには、南部町とすべての住民の方々との体験・ふれあい等を地域振興協議会と連携しながら進めていく必要がある。
板委員	人は人の中で生きるのだから、コミュニケーション力が大事である。教科書以外のところで、どれだけ地域との関わりを生み出せるか。
	議場見学等、政治が身近に感じられるような教育や仕組み、情報の取り方を知る教育が大切である。家庭教育は重要であり、親が子に伝える良い機会にもなる。
井上委員	コーチングという手法を教職員は習得しているのか。目標の立て方、達成の仕方など、コーチングという観点から子どもたちを指導できないか。
永江教育長	教員そのものの指導力にもよらざるを得ないのが現状である。
板委員	例えばボーイスカウトはどうか。体験した人をまねて自分もそうなるという体験のチャンネルを増やすことにつながる。
	(2) 地方創生に果たす教育の力
	① ふるさとに学び、ふるさとを守り、ふるさととともにあり続ける子どもの育成にどう取り組むか
	② 「里山」構想に果たすべき教育活動は
板委員	コミュニティスクールの側面からせまってみてはどうか。教員の力だけでは限界。
森岡委員	中途半端な体験ではなく、しっかりとした体験が大切。それは、学力向上にもつながる。地域の力(地域振興協議会)を借りるために、教育振興計画を共有したい。そして、地域の力、大人の力を高めていきたい。
細田委員長	「ふるさとを愛する子ども」を目指したい。ふるさとを愛するとは、体験や人との関わり。体験をしながら人と関わる力を育む。
	「人と関わり、人から学ぶ」「人の体験から学ぶ」ことを大切にしてほしい。
	外の人から見た南部町のよさを聞く機会がほしい。
坂本町長	客観的に見ても南部町は恵まれている。「南部町でいい思い出を沢山した」「南部町で楽しい思い出が沢山できた」「南部町で自分は輝いていた」という記憶や記録がふるさとに対する愛着を生み出すのではないかと思う。
井上委員	町出身の活躍者による、特に中学校での講演。こんな人がいるという情報提供をする。里山については、先人たちのやり方が良かったから今が良い。
	地域振興協議会の取組を支援し、広げていくこと。先人たちがやってきたことを次に繋ぐ。地域振興協議会同士で連携をとる。
坂本町長	地域振興協議会同士の交流は必要。子どもを通じて連携すること。

	「点在している」ということが里山の1つの条件。もっと子どもたちを山に入れて魅力を伝えたい。
森岡委員	まちづくり会社に南部町の子どもの課題をしっかりと伝え、これまでのことに縛られない新しい考えで解決に向かうまちづくり会社に期待している。
坂本町長	まちづくり会社は、里山デザイン大学を運営する。知恵をさずけるという意味合い。
永江教育長	ふるさとウォークは、1日町の中でストーリー性のあるドラマを体験させたい。 里山の視点を取り入れたウォークを目指したい。
	地域振興協議会には、7つそれぞれが「〇〇の体験は自分たちに任せて！」というように手をつなげる関係性を支援したい。
	集落では伝統行事の整理が必要。
	家庭にはできそうな具体的な体験の提示をする。
坂本町長	地域振興協議会同士の交流が図れる体制をつくる必要がある。 考えを1つにまとめることは難しい。
永江教育長	区別・整理をすることで、連携・交流がみえてくるのではないか。
坂本町長	教育委員会から子どもの健全育成のための整理を依頼してはどうか。 子ども同士のつながりはある。
細田委員長	日にちの取り合いと子どもの取り合いに終始する。 大勢の中で賑やかな体験をさせたい。そのためにおもとを整える。 子どもの出番を作ることが体験となる。
坂本町長	不登校・引きこもり・家から出にくい等の子どもをターゲットにしたものを振興協議会レベルでできないか。
永江教育長	ねらいを共有すれば可能ではないか。
坂本町長	不登校だった子が社会人となってどうなったか調査をしてみてもどうか。
	【4. 挨拶】
	【5. 閉会】
	午後0時00分